

『まんじゅしゃげ ディレクターズカット版』 - 夕星

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

「ねえ、章輔さんは知ってますか？」

俺が紀京の問いかけを無視したのはこの秋の（何とも季節外れの）うだるような暑さのせいではなかった。ただ単に、紀京が大きな黒い瞳を輝かせている時は危険だと、経験上知っていたからだ。

だから答える気もなく、手にしたアイスを食べ続けた。その白くて甘くてクリーミーでかつ冷たい物体は、既に下の方が溶け出している。崩壊を防ぐために、下から舌ですくい取る。この際みっともないなんてことは無視だ。炎天下での冷たいアイスに比べればそんなものは米粒ほどの問題もない。

そもそも何で今日はこんなに暑いんだ。もう夏って終わったんじゃないのか？ 数日前に学園祭だって終わったはずなのに。学校にクーラーがあればもう少し歩みも速くはなるだろう。しかしあのボロ学校にそんな親切な設備はない。仮にあったとしても、今は秋なのだ。稼働させてくれる訳がない。

紀京は暫く俺の返事を待っていたようだった。しかしその満面の笑みは、俺が黙々とアイスを食べるにつれ、次第に笑顔を貼り付けたままで強張って行った。

「章輔さん？」

再度呼び掛け。しかし無視。横目で様子を窺うと、紀京の額には青筋が見えるようだった。彼女は手の中にある溶けかけのアイスさえも気にならないようだ。

ここまで無視すると、危険云々よりも純粹に無視することが愉しくなるから不思議だ。しかしこれ以上無視を決め込むと、また別の意味での危険が迫りそうだった。彼女がアイスを握ったのと逆の手は、しっかりと学生鞆を握り締めている。中身が詰まっ
ていて、重そうだ。あれで殴られたらさぞかし痛いだろうなあと考える。その想像が易々と、しかもリアルに出来てしまうのが少し哀しかった。

「章輔さんっ。いい加減に——」

「うるせえ、お前先にアイス食え。落ちる——」

ぼとり。

「あ」

「だから言わんこっちゃない」

如何にも体に悪いと言わんばかりの、ピンク色をした固まりがアスファルトに溶けて行く。紀京は手に残った棒と地面の無惨な残骸を、暫しの間見比べていた。

「うー」

彼女の咽から聞こえる呻き声。そんなに恨めしそうな目で俺を見ても、俺は全く悪くない。悪くない、はずなのだが。

「判ったよ、俺のやるからこれで我慢しろ」

ふうと言う溜息と共に、俺は自分のアイスを差し出す。どっちにしろあと数口分しか残ってないけれども。

「今度こそ早く食えよ」

「この際仕様がなから、食べ掛けで我慢してやります」

紀京は俺の手からさっとアイスを奪い、ぶいっと横を向いた。そもそも学校へ行く前にアイスを食べるって一体なんだよ。どんなゆとりだよ。もちろん食べると言い出したのは紀京だ。断じて俺ではない。

数秒後に彼女の手が俺に向けて勢いよく突き出される。反射的に受け取ると、それはアイスの棒二本だった。再び口から出そうな溜息を押し込める。

それでも紀京は可愛い。普段は気が強く、俺なんて散々痛い目に遭わされている。しかしそんな紀京が時折垣間見せる、少女のよう（いや、実際に少女であるが）な愛らしさ。そのギャップがたまらない。そしてやたらと大きな黒い目、つんと尖った桜色の唇、天使の輪っかが見事に浮かぶ長い漆黒の髪、胸から腰にかけての滑らかなライン。そしてミニスカートとニーソックスの間に存在する絶対領域。味気ない紺一色

のスカートを逆手に取ったかのような、輝かんばかりの神聖なる領域。そう、紀京は見た目も完璧なのだ。

俺と紀京は時折、周囲からバカップルなんて言われる。しかし全くの誤解だ。何故なら俺はバカではない……が理由なら嬉しい。じゃあ俺はバカとかそういう話でもなく、実際はただ単にカップルではないってだけだ。ああ、カップルになりたい。俺は紀京と付き合うためならば悪魔に魂を売ったってかまわないのに……。

「で、話を戻すけど、知ってるって何をだ？」

アイス騒動でそんなことすっかり忘れていたのか、少し不機嫌そうだった紀京の顔がぱっと明るくなる。

「そうっ、あのね、平吉さんって紗耶が好きなんですって！」

友達の、当人にしてみれば公言されたくないことを、紀京は公道で高らかに言い放った。平吉、お前の純情な恋は今多くの人に知られたぞ。まあ当人を知らない人にしてみれば、平吉という名前的に、時代劇の話としか思わないかもな。

彼女は期待に満ちた目で俺の顔を覗き込んでくる。暫しの沈黙のあと、紀京がそれ以上何も話さないことが判ると、俺は一言いった。

「で？」

特に不思議はない返答だと思う。しかし紀京にしてみれば予想外だったようだ。

「で……って、知ってたのですか？」

「知ってるも何も、見てれば判るだろ。仮にも俺はあいつらと付き合い長いんだしな。それとも何だ、お前は今まで気付いてなかったのか」

むかつという表現がぴったりの表情を、彼女は露骨にする。

そして手にした学生鞆を大きく振りかぶった。

「それです。あのですね、私達で紗耶と平吉さんをくっつけてあげましょう！」

「くっつける？」

俺は自分の頭をさすりながら聞き返す。丁度教科書の角が当たったのか、やたらと痛い。こぶにならなきゃ良いけれど。

「そうです。ほら、友達を幸せにしてあげるのが、本当の友達なんですよ」

「何か上手いこと言ってるけど、ただ単にお前が愉しみただけじゃねえのかよ」

そんなことないですっ、と慌てて言う紀京の横顔を、俺は白い目で見ると。形の良い唇を突き出していた。あの、ちゅーして良いですか？ ……じゃなくて、この顔は、絶対に嘘だ。

「そりゃ、二人が付き合いえばそれをネタにからかえるから、嬉しいとか、ちょっとは思いますが」

紀京はもごもごと早口でそう付け足した。やっぱりな。

「まあ何にせよ、協力はするが、そう簡単にはいかねえぞ。お前平吉が何時から紗耶のこと好きか知ってるか？」

紗耶と平吉と俺は幼馴染みだ。幼稚園からずっと一緒に、良くつるんでいる。高校でそこに紀京が加わった（これには色々複雑な経緯があった。だが長くなるので、それはまた別の話で）。だから紀京は俺達の昔の話を知らないのだ。俺は首を傾げる紀京に言った。

「五歳の時」

ちらっと彼女を見ると思った通り、俯かせた顔を引きつらせていた。そりゃ幼稚園からずっと片思いってのは凄いな。もし平吉に行動力があつたら、間違いなくストーカーになれ……いやいや。

「つまりこれだけ長い期間実らず仕舞い。くっつけるのは相当大変だぞ？ それに、相手が相手だ。あの紗耶じゃあ一筋縄では行かないな」

簡単に行くものだったら、俺がもっと前にくっつけてるさ。

しかしどうやらそんなミッションインポッシブルが、紀京の勝ち気な心に火を付けてしまったようだった。

「ふふふふふ……」

横から不気味な笑い声が聞こえる。紀京はぐわっと顔を上げ、拳を握り締めた。

「やってやろうじゃないですかっ！ 章輔さん、私はその挑戦受けて立ちますよ」
不敵な笑みを浮かべながら、そう言ってのけた。別に俺は紀京に挑んだつもりはない。そんな命知らずな真似を進んでするほどバカではない。しかし紀京はこう言った以上、絶対に引き下がらない。だから俺はこいつを止めよう何て無駄なことをしなかった。それに、自分が安全圏に居る場合、得てしてこういうのは嬉しいのだ。
「もし二人がくっついたら、章輔さんケーキ買って下さいね。もちろんショートケーキをホールで、ですよ」

そう、安全圏に居れば嬉しいのだ。

俺付き合わないに賭けるなんて一言も言ってないのに。しかし紀京に言っても無駄だろうなあ。もう諦めの境地だ。

「あー、それで具体的にどうするつもりだ」

俺がやる気のない調子でそう尋ねた時、丁度学校の校門に着いた。だるそうな顔の制服姿の生徒が学校に吸い込まれて行く。そんな生徒とは対照的に、坊主頭の集団が掛け声と共に元気いっぱい学校周りの道を走って行く。校門を通り過ぎたってことはもう一周するのか。文化系の俺には絶対無理だな。

俺の質問に紀京は紺色のスカートを翻し、何ともうきうきとした様子で、つまり何か企んでいる危険なサインを見せながら答えた。

「私に良い考えがあるのです」

「あ、紀京ちゃんと章輔ちゃんだ。おはよー」

教室へ入るなり声が掛かる。このまったりおっとりとした声の主は、顔を確認するまでもない。

「紗耶、おはよ。ついでに平吉さんもおはよ」

ついでかよ、可哀想に。

教室の後ろの扉に入ってすぐの所が俺達の席だ。前が紗耶と平吉、後ろが紀京と俺だ。この席は内職してもばれにくいから気に入ってる。もちろん横が紀京だから、というのも気に入ってる要因だ。しかし席替えが自由ならば、普通女同士で並ばないか？ この並びを決めた紀京曰く、「男同士が横って気持ち悪いし、ほら男、女、男、女で交互に並ばないと」らしい。

俺と紀京は席に座り、後ろを振り返る。そして紀京はさっそく紗耶と何やら話し出す。どうして女というものは、ここまで色々と喋られるのか。不思議だ。

暑くて邪魔なのだろう、紗耶の肩まで伸ばされた茶色掛かった髪は、小さな二つ縛りになっていた。その髪型が元来の童顔が相まって、制服を着てなければ小学生でも通りそうだ。そんな、ぱっと見、一筋縄では行かないという表現が全く似合わないのが紗耶だった。そして彼女の机の上には大量の折り鶴があった。今までずっと折っていたようだ。

その横のメガネ男子、平吉はと言うと、ひたすら本を読んでいる。どうせ小難しいタイトルの本なのだろう。

「お前なあ、二人の時くらい紗耶と話せよ」

俺は平吉にこっそりと耳打ちをする。しかし彼は素早く首を左右に振り、再び本に視線を落とした。

平吉は無口だ。そして照れ屋でもある。いや、照れ屋だから無口なのか。メガネキヤラというものを理解しているため、と言う訳ではもちろんないと思うが、平吉の読書量はとてつもなく、それに比例しただけの知識を持ち合わせている。ただそれを披露する場はあまりないようだ。

それにしても、懸想してる相手と二人っきりなのに話さないとか。こんな調子じゃあ、くっつけるのは難しいだろうなあと再認識。でも紀京のことだから、負けって認めたがらないだろう。

「そう、それでね——」

斜め後ろからどんと机を叩く音が聞こえた。

「肝試しをしましょう！」

紀京曰く、紗耶と平吉をくっつけるためには肝試ししかないらしい。怖がる紗耶を

平吉がフォローし、愛が芽生える云々。もっとも俺にはそんな上手く行くとは思えなかった。寧ろただ単に紀京がやりたいだけに違いない。

「あー、それ愉しそうー」

そんな奸計を知らずに、紗耶は無邪気に顔を綻ばせている。対して平吉は、頁をめくろうとする手を固めたまま、何も言わなかった。

「でも肝試しよりね、下駄箱とかそこら辺で、妖精さん見なかった？」

まるで、犬の惣一郎さんを見なかった？ とでも訊くような、至って普通の口調で紗耶はそう言った。

「いや、見てねえなあ」

そして俺も、戸惑いもせずに返答をする。

「そっか。さっきまでここに居たのがどこかに行っちゃって。エメラルドグリーンと紫の目の、初めて見る子だったのに……残念」

事情を知らない人がこの会話を聞いたら、一体どう思うんだろう。少なくとも俺ならば、そいつらの半径三メートル以内には近付かない。

紗耶には妖精が見えるらしい。小さい頃から時々こんなこと言うから、慣れっこだ。紗耶曰く、妖精は二対の半透明の羽と尖った耳を持つそうだ。それを聞いた俺は、ずっとエルフみたいな生き物を想像していた。しかし小学校の頃に彼女が描いた絵を見て驚いた。それはどう見ても猫と鼠の融合体に羽が生えた生き物だったのだ。

「紗耶、妖精なんて追っかけてると、妖精に化かされるわよ」

狸や狐じゃあるまいし。紀京がちゃかしてそう言うと、紗耶は、妖精は良い子だよーと頬を膨らませた。

「妖精。西洋の伝説——」

平吉が突然ぱつと顔を上げ、そう話し出す。しかしそれはガラガラという教室の扉が開く音に遮られた。平吉は如何にも残念といった顔で入ってきた教師に目を向ける。そして肩を落とした。

その教師は数学担当で、あだ名は少佐。先輩世代から続いているあだ名なので、俺は由来を知らない。彼の初回授業での第一声「諸君、私は数学が好きだ」はインパクト大だった。小太りで背も低い、吸血鬼のように恐ろしい。学校一怒らせてはいけない存在だ。そんな理由もあって、教室に散っていた生徒達は慌てて席に戻る。

「あとで相談しましょ」

紀京は俺にそう耳打ちをしてから、机の中から何かプリントを取り出す。ほう、少佐の授業で内職とは良い度胸だ。

「ところで章輔さん、ちゃんと宿題はやってきましたか？」

その時間、俺は地獄を見た。

土曜補講は午前中で終わる。午後は学校が自習室なるシステムを行っている（自習室とは言っても、ただ単に空き教室を使って勝手に勉強して良いよというアバウトなものだ）。しかし俺には大事な休みにそこまで好きこのんで勉強する気持ちが判らない。だから補講が終わり次第、さっさと帰る。今日もいつものように、さっさと帰るつもりだった。

しかし何故か俺は学校近くのファミレスに居た。家に帰ればただ飯があるのにと、寂しい懐に思いを馳せる。相談とは聞いたが、相談に金が掛かるなんて聞いていない。こっそりと財布を除くと、大量のレシートの山の中に千円札が二枚と小銭が少し埋まっていた。

俺と同じく半強制的に連れてこられた平吉は、席に座るなり本を取り出す。しかしそれは開く前に、にっこり笑顔の紀京に取り上げられた。

「……………」

一瞬平吉の両手は、ひょいっと宙に浮いた本を追う。だがすぐに彼は諦めたのか、深く息を吐きながらビニールのソファに身を沈めた。そんな彼の横では、紗耶がさっそくノートの切れ端で折り紙をし始めている。

「つるー」

器用な手付きで紙を織り上げる。すぐに鶴ができ上がり、それを平吉の頭に乗せ

た。平吉は何でもない風を装うためだろう、黒縁メガネを外してハンカチで吹き出す。しかし明らかにその顔は赤い。見ているこっちが恥ずかしいぞ。

「で、肝試しですっ」

紀京は注文したものが来るのを待ってから話し始めた。パステルピンクのテーブルクロスにハンバーグとサンドウィッチ、そして親子丼にくまさんパンケーキが並んでいる。くまさんパンケーキは鼻の部分にバニラアイスが乗せられるこだわりようだ。そしてこれを注文した奴は言うまでもない。

「くまー」

紗耶は満面の笑みでフォークを構えた。

「私、場所は裏山が良いと思うのです」

紀京は紗耶のはしゃぎっぷりを可憐にスルーし話を戻す。

「ちょっと待て、そもそも肝試しをやるってのは決定——」

「紗耶、やりたいわよね？」

「やりたいー」

手にしたフォークが、ずぶりとくまの鼻に突き刺さる。

「だったら平吉さんもやりたいわよね？」

「……うん」

平吉は一瞬ちらりと横の紗耶に目をやり、それから小さな声で賛同の意を示した。紀京め、紗耶の意見に平吉が反対しないことを判って訊いてやがる。しかし俺とて乗り気でない訳ではない。寧ろ——

「じゃあ決定。場所は裏山でね」

これ以上異論は認めないとでも言わんばかりの口調だった。

彼女の言う裏山とは、学校の裏にある山。だから裏山だ。しかし某狸型ロボのアニメに出てくるような、長閑な憩いの場所では決してない。俺達の世界での裏山は、哀しかな寂寥としている。昼間でも薄暗いために人の出入りは少ない。ただ山中にある墓へ参りに来る人が時々登るくらいだった。確かに肝試しには絶好の場所だろう。

「ならただの夜中の山登り、ってことかな」

平吉は箸を置いた。いつの間にか綺麗に親子丼を食べ終えている。こいつ、喋らないと思ったら（とは言ってもいつもろくに話さないが）食うの早すぎだ。しかも丼には米一粒も残っていなかった。

「真夜中の墓場を歩くのが『ただの』かは判らないですけどね」

紀京は不敵な笑みを浮かべ、テーブルに両肘を付いた。

「ってことは、脅かしたりするのはなしなのかな？」

紗耶の前には折り鶴が五羽ほど並んでいる。時折それを平吉の頭に乘せて遊んでいた。俺の見える限り、最高四羽が平吉の頭に乘った。（その度に平吉が顔を赤らめていたことは、言うまでもない。）もっともそうやって食べるのに集中しないから、バニラアイスを口元に付ける羽目になるのだと思う。

「本当はやりたい所なんですけど、人手不足ですしね」

如何にもがっかりと紀京は肩を落とす。そして彼女はサンドウィッチを手を伸ばした。それを嚥下する咽の動き、俺はそれを無意識のうちに見つめていた。しかし俺の視線に気付いた紀京とすぐに目が合ってしまう。ん？ と紀京は首を傾げた。

「とっ、ところでさあ、肝試しってあれだろ、ゴールに置いてある札とか取ってくるんだろ。下準備するのか？」

俺は慌てて何事もないかのように取り繕う。紀京がその後普通に会話を続けてくれたため助かった。

「それなんですけどね、誰か裏山のお墓に行ったことのある人、居ますか？」

誰も返事をしなかった。俺を含めた三人は、紀京の顔を黙ったまま見つめている。紀京はぐるりと辺りを見渡し、急に真剣な表情をする。

「あの墓場の奥には、何故か一カ所だけマンジュシャゲが咲き誇るんです。本当にそこにだけ。丁度、こう、人が横たわったぐらいの広さに……」

何か、冷房以外の寒気が俺を襲った。背筋に冷たいものが走った。俺の脳裏には、まさに紀京の言ったその光景が鮮明に浮かんだ。墓場の奥、暗闇の中に毒々しい赤色

をした花が浮かび上がる。

「マンジュシャゲ、彼岸花とも言いますが、あれ死人花って異名があるんです。何でか知ってますか？」

紀京はテーブルにぐっと身を乗り出す。それに合わせて彼女の長い黒髪はゆらりと揺らめく。そして囁くような低い声で言った。

「死者の血を吸うんです。だから、赤いの」

「——彼岸花。ヒガンバナ科の多年草」

その凜然とした雰囲気、突然ぶち壊したのは平吉だった。

「田のあぜ、墓地など人家近くに自生。秋の彼岸頃、三十センチメートル内外の一茎を出し、頂端に赤色の花を多数開く。花被は六片で外側に反り、雌しべ雄しべは長く突出。冬の初め頃から線状の葉を出し、翌年の春枯れる。有毒植物だが、鱗茎は石蒜といい薬用、糊料とする。以上広辞苑第五版より。第六版ではないから、最新情報ではないけれどもね」

滑らかな口調で一気にそこまで暗唱し、やっと平吉は口を噤んだ。そして満足げに二、三度頷いたあと、反応を求めるかのように左右をきよろきよろと見回した。しかし俺は平吉の予想だにできなかった妨害に付いて行けない。紀京なんてあまりに唐突なことで、怒ることも出来ずぼかんと口を半開きにしている。紗耶だけが、平吉ちゃん物知りーとのんびりとした口調で言いながら、折り鶴を彼の頭の上に乗っていた。

暫くの間を置いて、紀京はようやくショックから解放されたようだった。だがそれでも何と切り出せば良いか迷ってる風に、おずおずと口を開いた。

「えーっと……」

しかし紀京がそれ以上話す前に、紗耶に褒められたのが余程嬉しかったのだろう。

平吉は他二人の困惑を余所に再び口を開いていた。

「因みに花言葉は、悲しい思い出、想うはあなた一人など」

「あのう、平吉さん？」

「学名は *Lycoris radiata*。この *Lycoris* はギリシャ神話の——」

しかしそんな呼び掛けも余所に、平吉はまだまだ話し続ける。

そして遂に、ぷつん、という表現がぴったりの表情を紀京は浮かべた。

「っ、平吉さん！ いい加減にして下さいっ」

腰を浮かせ、憤怒の形相で紀京は叫んだ。しかし大声を出したあとにここがファミレスだということを思い出したのか、顔を赤らめ慌てて椅子に座る。そしてそれでもやや気色ばんだ様子で水の入ったコップに手を伸ばした。

平吉はというと、明らかにまだ話したそうだったが、おとなしく口を噤む。しかしどうやら彼の不思議そうな表情を見ると、どうして紀京に怒られたか良く判っていないようだ。とは言っても彼のそんな疑問も、紗耶に、平吉ちゃん凄いと褒められた瞬間消えたようだった。

俺は力なく椅子に座る紀京を、慰めるように言う。

「まあ紀京、平吉は歩く百科事典だから仕様がねえって」

しかし紀京が返事をするより早く、紗耶が無邪気に答えた。

「章輔ちゃん、百科事典なんて古いつて。今は電子辞書だよ。だから平吉ちゃんは歩く電子辞書。あ、でもあたし電子辞書持ち歩いてるや。だって百科事典と比べると持ち運びやすいし。ってことは、別に電子辞書って、電子辞書の方から歩いてくれなくても困らないよね」

折角紀京を慰めようとしたのに話を混ぜっ返しやがって。

「いい加減に話を戻して下さい……」

紀京は顔を俯かせ、ぽつりとそう呟いた。

さり気なく人をからかうのは嬉しい。確かにそうだ。だから俺は、普段意図的に紀京をいじめてる。しかし平吉と紗耶の怖い所は、それを全く無意識にやっている所だろう。特に紗耶なんか、ぼやぼやしてるけれど侮れない。さっきの紗耶の台詞のせいで平吉なんて、ちょっと凹んでいる。

「ところでさ、マンジュシャゲってどう漢字で書くか判る？」

汚名をそそぐためか、沈没状態からめずらしく早く立ち直った平吉は口を開いた。

「あーとんでもなく難しい漢字だろ。それこそ口では表現できないような」

他の二人は首を傾げたっきり何も答えなかったため、俺が答える。

「章輔さん、全く判ってないでしょう」

紀京がすかさず鋭く突っ込む。そのやり取りを見て平吉は、ここぞとばかりに微笑みを浮かべた。そして右手を伸ばすと、宙に字を書き始めた。

「マンジュシャゲのマンは、マンダラの——」

「はいっ、これだよ」

平吉を遮ったのは紗耶だった。その手には電子辞書。広辞苑で、マンジュシャゲの項目が引いてあった。

「そうそう、曼珠沙華。こんな漢字でした」

「歩く電子辞書は電子辞書に負けたか」

「だってあたしの電子辞書は頭が良いもん」

紗耶はえへんと胸を張った。平吉は折角作った貴重な見せ場をよりによって紗耶に奪われ、もう再起不能に、少なくとも俺にはそう見えた。

「まあ何だ。とにかくさ、話をいい加減に戻そうな。ほら、紀京。早く続き話せ」

あまりに平吉が哀れになったために、口早に紀京を急かす。

「えっ、えーっと、そうそう。だから、墓場の更に奥に曼珠沙華が咲いてるんです。丁度人が横たわったぐらいの広さに。この意味が判りますか？」

突然の振りに紀京は戸惑ったが、すぐに先程と同じ厳かな口調を取り戻す。再び妙に緊迫感を持った空気が場を支配した。

紗耶は紀京の問いかけに頭をふるふると左右に振る。俺は生唾をぐくりと飲み込んだ。紀京は皆の方に顔を寄せると、囁くように言った。

「死体が、埋まってるんです」

その幽かな紀京の声は、いやに俺の耳に響いた。ピークは過ぎたと言え、様々な雑音に満ちるファミレス内だったのに。紀京は再びゆっくり口を開き、厳かな口調で話し始めた。

「私、聞いたことがあります。明治の時代、思い合ってる男と女が居たのです。そして、その男に密かに思いを寄せてる女が居た。そしてある日——」

紀京が長い話を終えても、暫くの間粛として誰の声もない。

ファミレス内はアニソンが流れている。しかしそんなアップテンポな曲調でも、この物憂さを吹き飛ばすことは出来なかった。百年と二十年前から、その女は男を愛し続けている。

「つまり、今でもそれを恨んだ女が化けて出る」

俺が口を割り、

「愛しい男の名を呼びながら、曼珠沙華の中に」

紗耶が恐る恐るそれを継いだ。

「ね、怖いでしょう」

紀京は普段の軽快な口調に戻っていた。そして艶然とした笑みを浮かべる。

「あ、あのさ、俺はそんな所で肝試しなんてやるべきじゃないと思うんだ。いや、怖いとかじゃなくて……ほら、罰当たりだって！」

思いっきり顔を引きつらせながら、突然平吉がそう声を上げる。しかし紀京に白い目で見られると、そこで口を噤んだ。いや、顔が蒼白な所を見ると、ただ単にそれ以上何も言えないのかも知れない。

「だから、肝試しのプランはこうです。まず第一群が山登りをして墓地まで行く。そしてその奥にある曼珠沙華の所まで行って、リボンでも結んでおく。そして道に戻って、更に上って頂上まで。そこで第二群の到着を待つ。第二群は一定時間過ぎたら出発、同じように山登りをして、途中リボンを回収して頂上まで行く。ね、これでどうですか？」

完璧なプラン！ そう言わんばかりに自信満々の様子だった。

「良いんじゃないかね」

俺は特に何も考えずに返事をした。俺は帰りに相談と誘われたはずだが、相談も何も完全にプランが出来てるんじゃないか。

「一群とか二群ってことは、一人ずつやる訳じゃないのかな？」

紗耶は横でぐったりしている平吉の頭をぼふぼふと叩きながら、そう尋ねた。だがそんな紗耶の愛らしい仕草にも、今の平吉は何も反応しない。その死んだ目は宙をさまよっていた。

「肝試しするのは二人ペアでやるものですよ」

紀京はちらっと俺に目をやると、小さく笑って見せた。だって目的は肝試しそれ自体じゃないです からね、俺には紀京がそう言っているように見えた。俺は頭を掻くと、

「あー、平吉。お前もこれで良いか？ 異論はないな？」

平吉は魂が抜けたような顔付きで、それでも二、三度力なく頷いて見せた。

「じゃあこれで決定ね。やるのは今晚で良いですか？」

紗耶はあっと小さく声を出して、

「紀京ちゃん、ごめんだけど、明日じゃだめかな」

と、おずおず申し出る。紀京は一考し、

「じゃあ明日、夜八時に校門集合ってことで。紗耶はそれなら大丈夫かな。男からの異論は認めない ですからね」

そう言いたいことだけをまくし立てると、席を立った。

「みんな、何ぼやぼやしてるんですか。もう決まったんだから帰りますよ。ほら、早く立って立って」

そう言って紀京はさり気なく俺の手に何かを握らせる。だが俺には、それが何かなんとなく見当が 付いた。なので平吉の肩をぼんと叩き、

「平吉、よろしく」

そう言ってそれを渡す。心ばかりと千円札も一緒にくれてやった。平吉は反射的にそれを受け取る と、何だこれと言いたげに手の中ものを見つめる。そしてそれが何であるかを悟ると溜息を吐いた。それは伝票だった。

「なあ、紀京」

平吉と紗耶と別れ、俺は紀京と二人だった。大通りを離れ、閑静な住宅街の中を歩く。ファミレス 内の涼しさに慣れた体にとって、外は灼熱地獄だ。湧き出てくる汗をタオルで拭きながら、俺は尋ね た。

「俺思うんだけどさ、肝試しで二人を仲良くさせるって、そもそも平吉が頼りにならないと意味ない よな」

「大丈夫でしょ。平吉さんは怖がったりしないですって」

ノートを額に翳し日陰を作っている紀京は、あっけらかんとそう答えた。今までの様子を見る限り、どう考えても大丈夫ではなさそうだが、紀京にはそう見えならしい。

「何です、実は章輔さんが怖いとか？」

紀京は俺に顔を向けると、小馬鹿にするような笑みを浮かべる。そんなことはない。少なくとも、この四人の中ならば一番怖がりでない自信がある。

しかし平吉と紗耶がペアってことは、俺は紀京とだな。万が一怖がる素振りでも見せたら一生もの の弱みだな。それこそホールのケーキだけでは到底埋められないような。ん？ でも一生ものってこ とは、一生紀京に付きまといわれるのか。それはそれで……っといいや。

* * *

俺の部屋に電話はない。

「章ちゃん、電話よー」

その夜。部屋で漫画を読んでいた俺は、お袋に呼ばれた。今丁度良い所なのにと若干いらだちながら、大きな足音を立てて階段を下りる。ああ、続きが気になる！ あの執事が実は敵サイドだったん て、俺は絶対に認めないからなっ。

降りてすぐの廊下に、子機を片手にお袋が立っていた。そしてにやっと笑いながら

俺に受話器を渡す。

「女の子から」

笑いを堪えた口調でそう言いながら、俺に子機を差し出す。その好奇の目に耐えかねて、俺は慌ててひったくると、二階へ駆け上がった。そして部屋の扉を勢いよく閉める。ベッドの上に散らかっている漫画を片手で乱暴に隅にどけ、そこに腰掛けてから保留を切った。

「も、もしもし」

「あ、章輔ちゃん？」

俺はてっきり紀京だと思った。がっかり、とまでは行かないが、拍子抜けだった。彼女からの肝試しの相談かと思ったのに。

それにお袋は紗耶を知っている。だったらあんな含みのある言い方をしないはず……。

「えへへー、章輔ちゃん女の子から電話って聞いて、紀京ちゃんだと思ったでしょ」

その弾んだ声は、まさか仕組まれたのか？ そういえば紗耶は俺のお袋とやけに仲が良いなあ。体からどっと力が抜け、俺はそのままベッドの上に倒れ込んだ。

「うるせえよ。用件を言え、用件を」

「あ、章輔ちゃん怒ってるー。そう、用件って肝試しのことなんだけど。あれって章輔ちゃんが提案したの？」

「違う違う。紀京が勝手にだ」

「そうなんだ。あたしてっきり、章輔ちゃんが紀京ちゃんと近付きたくてなのかと思ったよ」

紗耶はさらっとそんなことを言う。が、そのさらっとした発言のせいで俺は思わず受話器を取り落としそうになった。

「お、お前なあ……」

紗耶は俺が紀京を好きだと知っている。

「でも言い出したのは紀京ちゃんだったとしても、実は乗り気なんですよー？」

そう更に俺を追い詰めるようなことを言う。しかし紗耶に悪意は全くないのだ。ただ無邪気なだけだと、長年の付き合いから判る。もっとも悪意がないから逆に困ったものなのだが。

「うるせえってば」

紗耶の言ったことはあまりに的を射ていた。俺が肝試しに強く反対しなかったのは、俺がやりたかったからだ。それこそ肝試しでは、紗耶と平吉がくつつくのは難しいと判っていながらも、肝試しで恋が芽生えるというのを、俺も紀京との間に期待しているのだ。

春に一目惚れして約半年。いい加減に告白して、紀京と付き合い始めた。平吉のように十年以上片思いなんて、俺は御免だ。だがなんせ相手はあの紀京。何の確証もなしにアクションを取って、もし失敗するとどんなことになるか。むう、恐ろしい。

そう、俺は失敗する訳にはいかないのだ。それには何か決定打が必要……。

「章輔ちゃん、やっぱり乗り気だー。あのね、あたし応援してあげるから。だから肝試し頑張って！」

そう力強く言った紗耶に、

「応援と言え、紗耶に頼みがある」

と俺は切り出した。こんな協力を依頼できるのは紗耶しかいない。恥は覚悟だ。俺は神妙な口調で先を続ける。

「肝試しのあとで、紀京に俺のことどう思ってるか訊いて欲しい」

「章輔ちゃん、そんなこと頼むなんて、男らしくない」

紗耶は暫しの沈黙のあと、見損なつたと言わんばかりの口調でそう言った。しかしここで諦める訳にはいかない。

「お前知らないのか。今の時代、男らしいなんて言葉は差別用語だから使っちゃいけないぞ」

「んー、じゃあ格好悪い」

ぐ……、あまりに直接的な言葉が胸にぐさりと刺さる。しかし背に腹は何とやら

だ。

「まあ何にせよ良いよ、訊いてあげる。あたしも気になるしねー」

そんなこんなで電話は切れる。

それにしても、紀京も紗耶も他人にちょっかいは掛けるが、肝心の自分の状況を判ってない。お互いもう一方の男の気持ちを察してやろうぜ。まあそんな奴らだから面白いのだが、やはり当事者としては頭の悩ませ所だ。

明日紀京が怖がってくれば良いのだけれど。

紀京が怖がるか否か、それが問題だ。

* * *

そして日曜日。夜中の学校に集合した俺達は、裏山まで歩く。真夜中の校舎というのは気味が悪い。紀京が肝試しの場所を裏山にして良かった。校舎に忍び込むなどだったら、怖がらない自信があまりない。

裏山までは学校から十分程度の距離だ。山に近づくに従って、少しずつ民家は減り、それに伴って街灯の数も減る。昼間の暑さは影を潜めひんやりとしており、半袖の俺には肌寒いくらいだった。夜の道はひっそりしており、四人の他愛もない話し声（とは言っても実質話しているのは三人だ）がやたらと響く。空を見上げると、星のない空に青白い満月が浮かんでいた。そのぼうつとした光は、何か漠然とした不安を俺にもたらした。

ここからは山道という所で紀京は立ち止まる。そこから一歩進めば、舗装された道は途切れて土が剥き出しになり、道の左右には木々が乱立する。しかしここから見るのはほんの数メートルで、それ以上は闇に包まれていた。

俺達の横には、最後の街灯がぼつんと立っていた。ジジッと音を立て、蛾がその周りを飛んでいる。そしてその下には、錆だらけの自転車が寂しげに放置されていた。「じゃあペア決めるので、くじを引いて下さい」

紀京は静かな声でそう告げると、四本のこよりを握って紗耶に差し出す。何とも用意周到なことだ。

「赤い印のが二本ありますからね」

「えーいっ」

こんな雰囲気の中でも、普段と全く変わらない元気さで紗耶はくじを引く。印付きだった。そして紀京は、続いて終始無言の平吉にも引かせる。

「じゃあ平吉さんは紗耶とペアね」

にっこり笑いながら、紀京は手に残った二本を無造作に鞆に突っ込んでいる。大方全部赤い印付きなのだろう。

「平吉ちゃん、あたしとペアだって。頑張ろうねー」

そう言いつつ紗耶は、俺にこっそりと視線をやる。紀京ちゃんと頑張ってるね、とその目は伝えてきた。

何だか色々な陰謀が渦巻いているなあ。

「順番はじゃんけんにでもしましょうか」

そう問いかける紀京に、紗耶がはいはいと手を挙げた。

「紀京ちゃん、あたし先が良いなー。平吉ちゃんもそれで構わないでしょ？」

順番なんてこの際関係ないかも知れないが、何と非情な。しかし平吉は紗耶の意見に反対することなどもちろんせず、ただこくこくと首を上下させた。

「そう、判ったわ。じゃあこれリボン。曼珠沙華に結びつけてね。墓場までは一本道だから迷わないとは思うけど……大丈夫よね」

「うん、大丈夫。迷ったら誰かに道を訊くから」

誰かって誰だよ、とそう突っ込みたくなる。しかし相手は紗耶だ。訊いた所でまともな答えは期待できないな。紗耶は鞆のポケットに受け取ったリボンを入れている。

「てか紗耶、何でお前そんな荷物あるんだよ」

肝試しだけなのに、やたらと紗耶の鞆は膨らんでいた。

「お守りだよー。何が出て来ても大丈夫なように、数珠、お札、十字架、にんにく、

それにべっこう 飴とか、色々詰め込んできたのー」

そう紗耶は怪しげな呪文と共に、指を二本立てた手を勢い良く前に突き出す。曰く、悪霊退散のおまじないらしい。

ふうと俺は溜息を漏らす。そしてふっと思い出して平吉の様子を窺った。彼は三人から少し離れた所に立っている。近付くと、血走った目をカッと見開き、地面を凝視していた。

「平吉、お前本当に平気か？」

平吉は俺の突然の呼び掛けに体をびくりと震わせ、顔を上げる。

「あ、ああ、章輔か。大丈夫、大丈夫だ。本当に……」

それは消え入るような声だった。平吉はそれから暫くの間、大丈夫、大丈夫とぶつぶつ呟き続けていた。俺はもう何も平吉に掛ける言葉が思い浮かばなかった。

「じゃ、紗耶を頼んだぞ」

それだけ口早に告げ、まだ大丈夫を続ける彼の側を離れた。

やばい、こいつ絶対に大丈夫じゃねえや。こんな調子じゃ、くつつけるどころか逆効果にもなりかねない。ま、俺は紀京に接近という目的を遣り遂げるけどな。

そして平吉のテンションなど全くお構いなしに、肝試しは始まるのだ。

「多分二十分くらい掛かると思います。山の中は街灯がありませんが、ちゃんと曼珠沙華まで辿り着いて下さいよ？ まあ今日は満月だから大丈夫でしょう。で、その後頂上まで登るのもお忘れなく。きっと夜景が綺麗ですよー」

前途敵なし順風満帆！ そう言い出しそうな程、紀京は端から見て上機嫌だった。きっと彼女には平吉と紗耶が付き合い出す（そして自分がそれをからかって愉しむ）光景が見えるのだろう。

「判ったー。じゃあ平吉ちゃん、行こ」

これまた愉しそうな紗耶は、なかなか動こうとしない平吉の手を取った。そしてぐいぐいと引っ張る。

手を握ってる。平吉と紗耶が手を握っている。しかしどうしてだろうか、俺はちっとも喜べない。

「くれぐれも、幽霊に気を付けて下さいね」

追い打ちを掛けるような紀京のその言葉で、平吉は曼珠沙華にまつわる話を思い出してしまったようだった。青ざめた顔で、紗耶に半分引きずられて山道へと入って行く。

そしてすぐに、まるで暗闇に吸い込まれるかのように二人の姿は見えなくなった。

俺と紀京は街灯の下に取り残される。

「行きましたね」

「そうだなあ」

「上手くいくと良いですね」

「そうだなあ」

「二人がちょっとでも仲良くなると思いますか？」

「そうだなあ」

「……………」

「……………」

この計画が平吉は頼れる、ということ的前提にしてるのならばそもそも根本的に間違ってるのだ。何でそこが判らないのだろうか。紀京には平吉が頼りになるように見えるのか？

それにしても二十分後に俺達が出発ということは、ここで紀京と二人っきりだ。出発してしまえば良いけれど、何もせず待機というのは何だか気不味い。夜。二人っきり。畜生、落ち着かない。

「そういえば、訊きたいことがあるんですけど」

だから紀京から話してくれた時は正直安心した。

「平吉さんって、何で平吉って名前なんですか？」

紀京は髪を掻き上げながら俺に向き直る。

「それは、名前が古くさいって話か」

「そうです。だって今時平吉なんて」

平吉が誰かと親しくなると、必ずされる質問がこれだ。しかし本人は理由を言いたがらない。俺は 幼馴染みだから知っているが、そりゃあもう固く口止めされていた。

「仕様がないな、平吉に俺から聞いたなんて言うなよ」

しかし友情なんて恋心の前には簡単に消え去るのだ。紀京が好奇心に溢れた目で俺の顔を覗き込んでいるのに、答えない訳がない。

「あいつの婆ちゃん、時代劇が好きだったんだ。相思相愛の関係にある男女で、その女が別の女と入れ替わる……みたいな話。この男を当時有名な二枚目俳優がやったらしくてなあ」

「ふーん。じゃあその男が平吉って名前だったのですか」

納得とでも言うように紀京は頷いた。

「いや。平吉ってのは、ただの通行人。その入れ替わった女に、男はどこかって尋ねられて、知らないよって答える程度の役」

暫しの間返事はなかった。腕を組み視線を落とすと、何やら考え込む。まあ当然の反応だろうな。

「えっとですね、何で、ですか？」

暫くしてから紀京は顔を上げると、そう尋ねた。どうやら彼女の中で合点しうる理由が見つからなかったらしい。

「曰く、その通行人の演技があまりにも素晴らしかったから、らしい」

「通行人なのにですか？」

「通行人の演技を舐めるなよ？ 通行人の演技はな、その歩く姿だけでその人物の性格から生活まで、全て表現しなくちゃならないんだ。つまりそれをやってのけたその通行人・平吉は素晴らしい。以上、平吉の婆ちゃんが言ったこと」

「役者は千の仮面を持たないといけない……」

紀京は納得したような、いやそれでもやはり納得しかねるように、腕組みをすると眉根に皺を寄せた。

「もっとも今のは、平吉の両親を無理矢理納得させる口実で、実のところは平吉役の人のファンだったんだらうけどな」

平吉の婆ちゃんは怖い。俺がなるべく平吉の家に行かない理由はそこにある。立ち向かえるものは誰も居ない。いや、何故か紗耶だけはやたらと気に入られているか。だからそんな婆ちゃんが恋する乙女に戻って、初孫に愛しい人の名前を付けようとした時、平吉の家族は誰も止められなかったのだ。

「じゃあ何で、その役者さんの名前を付けなかったのでしょうか」

「そりゃあ無理な話だ。なんせその名前はケンケン犬太郎って言うんだからな」

紀京は笑う所なのか呆れる所なのか、何とも反応に困っているようだった。そしてやたらと冷静な声で、

「何にせよ、平吉さんのイメージがとっても変わりました」

と、そう呟いた。別に本人に非がある訳ではないぞ。

そんなこんなで二十分は過ぎ去り、俺達は山へと入って行った。紗耶が平吉の手を取ったように俺も紀京の手を取る、何てことはもちろん出来なかった。だが紀京に情けない所を見せる訳にはいかないと、俺はずんずん奥へと進んで行く。

「紗耶達がちゃんと頂上に着いてると良いですね」

「平吉が恥をさらしてなければ良いけどな」

道は暗い。街灯がなくても満月だから大丈夫と思いきや、高く伸びる木に遮られ、思ったよりも暗い。細い山道の数メートル先は見えない。

「思ったより、暗いですね」

紀京も俺と同じことを考えていたのか。

ところで彼女がいつもに比べて俺の近くを歩いているのは気のせいかな？ いや、気のせいに違いない。気のせいに。妙な期待なんてするなよ俺。

「怖いとか言うなよ？」

「こ、怖くなんかないですっ。バカにしないで下さい！」

怒気を含まれた声でそう叫ぶと、それに応えるかのように突然どこからかがサッと音がした。俺と紀京は一瞬歩みを止め、恐る恐る左右を見渡す。しかし見えるのは黒一色に染め上げられた景色だけだ。

「き、きっと動物か何かだって」

声が裏返りそうになるのを堪えながら、俺は自らを鼓舞するためにもそう言った。だが紀京は、そうね、と小さく答えたつきり黙り込んでしまった。俺もそれ以上言うことがなく、お互い無言のまま山道を進む。

山の中は深閑としており、そのため落ち葉を踏みしめる音がやたらと響く。時折枝を踏んでしまっ ては、パキッという音に驚かされた。紀京は相変わらず黙りこくったまま、予想外の重苦しい雰囲気 気に、俺は必死に頭を回転させた。

「ところで、曼珠沙華の怖い話ってお前が作ったんだよね？」

「違います。あの話は本当に聞いた話で……」

安心しようと訊いたはずなのに、不安が掻き立てられたただけだった。紀京の声にいつもの張りはなく、こっちまでその沈鬱さに引きずられそうになる。

いや、待てよ。今が俺の期待していたチャンスではないのか。怖がる紀京を俺がフォロー、そして愛が芽生える予定ではなかったか。

俺の体が火照ってくるのが判る。そうだ仮に紀京が怖がっても、肝心の俺が怖がってたら意味がない。確かに怖い。確かに想像していたよりも余程怖い。でも逃げちゃだめだ。逃げちゃだめだ逃げちやだめだ逃げちやだめだ。

俺はひるむ心に鞭を打つ。そして大声と共にビシッと手を前に差し伸べた。

「どーまんせーまんツ」

「章輔さん、何を……」

紀京は俺の突然の奇行に戸惑っていた。

さあ紀京よ、この俺を見てとくと戸惑うが良い！ そうすれば怖さなんて忘れるぜ。

「これは紗耶に教わった悪霊退散のまじないだ。ほら、お前もやってみろ。まず指を二本立ててだな……」

紀京も頭に疑問符を浮かべつつも、俺の言う通りの姿勢を取った。先程までの緊張が解けたのか、紀京の顔が和らいでくる。そんな紀京を見て俺は調子に乗り、再び呪文を大声で唱えた。そして延々と同じ文句を叫び続ける。

「もう章輔さんったら、ばっかみたい」

紀京は普段、俺の馬鹿げた行動を殴ってでも止める。しかし今は、ただ横で声を立てて笑っている だけだった。そして俺達はそんなことを続けながら、更に墓場を目指して山を登って行った。

十分くらい歩くと、急に開けた場所へと出た。

「墓場だ」

俺はごくりと唾を飲んだ。つい先程までの心意気はどこへやら、再び鬱々とした感情が俺の心を占める。

地面は舗装され、沢山の墓石が規則的に立ち並んでいた。遮るものは何もなく月光は届く。しかし古びた墓石の影を伸ばすばかりで、不気味さが増すのみだった。今まで山道を歩いてきた俺にとって、コンクリートの道はまるで歩きやすい。それなのに、一歩足を踏み出す度に足は重くなっていった。

紀京は怖がっているのだろうか。ちらりと横顔を盗み見るが、その無表情な顔からは何も読み取れなかった。畜生、俺だけ怖がってたまるか。そう、幽霊なんて居ないんだ。そう強く心で唱え、墓場を奥へ奥へと進む。

暫くすると墓石の列は途切れ、再び地面が剥き出しになる。森との境目だ。

「この先に、曼珠沙華が咲いています」

紀京は淡々とそう告げた。俺はごくりと生唾を飲み込む。この奥に、死体が埋まっている。そして愛しい男の名を呼びながら……。よくよく目を凝らすと、少し入った木の陰に何やら黒い植物の影が見えた。曼珠沙華だ。

「さっさとリボンを回収して、頂上へ行きましょう」
「判らんで、紗耶組が怖さに負けてリボンを付けてないって可能性もあるしな」
そう軽口を叩きながら曼珠沙華に近付く。
その時だった。
「しょうすけさん……」
小さな声がどこからか聞こえた。
俺は横にいる紀京を見る。今のはお前だろ？ 俺はそう目で尋ねる。だが紀京は、
「わ、私じゃない」
そう答えた。
「じゃあ、今のは」
俺はそれ以上続けることが出来なかった。小さな悲鳴と共に紀京が俺の腕を掴む。
しかしそのこと にちょっとした嬉しさを感じることも出来ない。俺は身の毛がよだつ
のを感じた。
「違う、きっと気のせいだ。違うって」
先程の言葉を打ち消すかのように慌ててそう言う。だが紀京は俺の腕を掴んだまま
放さなかった。俺は紀京の背中を促すよう軽く押し、数歩、曼珠沙華へ歩み寄る。
「しょうすけさん、愛してる……」
再び声が聞こえた。どこか憂いを含んだ、震えるような囁き声だった。そして俺
は、曼珠沙華の後 ろに白い影を見た。暗闇の中に浮き上がるような白い影を。
——曼珠沙華の下には死体が埋まってる。
——今でもそれを恨んだ女が化けて出る。愛しい男の名を呼びながら。
「ひっ」
俺の腕を掴む紀京の手に力がこもる。
白い影はゆらりと立ち上がった。そして俺はそれが白い着物を着た女の後ろ姿だと
判った。いや、初めからそんなこと判っていたのだ。ただその恐ろしい考えを受け入
れたくなかっただけだ。そう、ここには女の幽霊が出るんだ！
「章輔さん、あ、あれ」
紀京の声に女はぴくりと肩を動かした。そして、ぎ、ぎぎ……と、痙攣するかのよ
う小刻な動きで に俺達の方へ振り返る。俯き加減のその顔は、長い黒髪に隠れて見え
ない。そして俺は気付いた。
「しよ、章輔さん、脚……脚がない……」
俺達に正面を向けた女は、だらりと落とした手をゆっくりと持ち上げる。そして白
い手をこちらへ 差し伸べた。
「愛してる……」
白魚のような指が、おいでおいでと手招きをする。
俺は頭が真っ白になった。膝が震えそうなのを必死に抑える。歯の根が合わず、口
からは荒い息が 漏れる。
逃げないと。
しかし体は金縛りにあったように動かない。女から目を離すことも出来ず、ただ背
筋を伝う冷や汗 を感じた。恐怖が体から溢れ出し、頭は混乱状態だった。ただ怖いと
いう言葉だけが、ちかちかと点 滅を繰り返しながらそこを渦巻いている。
もうだめだ。
見境のない悲鳴が口から出そうになる。その時だった。俺は自分の右腕にしがみつ
く紀京に気付いた。ぎゅっと目を瞑り、厭々をするように首を動かしている。普段の
気丈な紀京の姿はなく、一人の か弱い女の子がそこにいた。紀京の暖かい体温が、俺
の腕に伝わってくる。そしてその温もりが、俺 を覚醒させた。
ああ、紀京を、守らないと。
俺は紀京の手に、そっと自分の左手を重ねた。紀京が顔を上げる。俺を上目遣いに
見つめるその目 は潤んでいた。任せておけ、口には出さずそう語りかけながら、腕を
握る彼女の手を引き離れた。そ して側に落ちていた太い木の枝を拾う。
横を見ると紀京は両手を組んで、慌てたように首を左右に振った。危ないからやめ
て、そう伝えている。

紀京、男にはやらなきゃならない時があるんだ。

そう、あんなのはただの幻覚だ。俺は何もない所に向かって棒を振るだけなんだ。そう自分自身に強く言い聞かせ、正面で棒を構えた。手が震えそうになるのを、強く棒を握ることで必死に堪える。大丈夫、俺は流浪人の漫画を頁が擦り切れるまで読み込んだんだ。だから剣の使い方は完璧だっ。

しかし恐怖はしつこく心に蔓延っていた。女はいまだ手招きを続けている。と、突然顔を俯かせたままこちらへ少し歩み寄る。いや、歩み寄るといよりも、宙を滑るように移動した。その動きに合わせて、女の黒髪が蛇のように蠢く。

「厭っ」

紀京の短い悲鳴で俺は我に返る。そう、俺に怖がっている暇なんてないんだ。紀京を守るんだ。

あれはただの幻影だ。

あんなの怖くない。

そう、平吉の婆ちゃんの方がよっぽど怖いぜ！

俺は女に向かって勢いよく数歩踏み出した。

「うおおおっ」

雄叫びと共に俺は手にした棒を大きく振りかぶった。

「章輔ちゃん、あたしだよ！ こ、殺さないでえっ」

女はそれまでの優雅な動きとは一変、突然そう叫ぶと、頭を手で庇った。そしてその反動でぺたん とみっともなく、曼珠沙華の中に尻餅を付いた。

「えっ」

俺は振り下ろす手を止める。倒れた女の頭は、何か髪がずれている。

「ううっ、章輔ちゃんのバカあ」

「紗耶。お前、紗耶か？」

紗耶は憤慨した様子でそう言った。そして四つん這いになると曼珠沙華の中から抜け出した。それから思い出したかのように頭に手をやり、ずれている髪を直す。どうやらウィッグのようだった。そんな様子を見て、紀京が小走りで近付いてくる。

「紗耶……あんたどうして」

紀京は俺の横に立つと、そんな力の抜けた声で呟いた。当の紗耶は立ち上がり、のんきに着物に付いた泥を払ってる。良く見ると白い着物（と言っても肌襦袢のようだった）の裾は黒く塗られていた。だから暗闇に紛れて脚がないように見えたのか。

「えっと、驚いたでしょ」

紗耶は俺と紀京の顔を交互に見たあとそう言って、無邪気に微笑んだ。俺と紀京はもう何も言う気が起きなかった。

俺達は三人で頂上を目指した。再び山道を、落ち葉を踏みしめながら歩く。紗耶が言うには、平吉は頂上で待っているらしい。彼には俺達を脅かす計画は話してないようだった。

「敵を欺くにはまず味方からってね」

元気良くそんなことを話す紗耶と対照的に、俺と紀京はげっそりしていた。俺の熱い葛藤は一体何だったのか。そんな虚しさが心に広がる。俺、死ぬ気で頑張った……よなあ。

すぐに山道の終端部分が見えてきた。頂上には小さなスペースがあり、展望台のようになっているらしい。紗耶は頂上が見えてくると、

「平吉ちゃんを探してくるねー」

と、軽やかな足取りで駆けて行った。

「紗耶は元気ですねえ……」

「ああ。元気だなあ……」

「ぎゃあああああああっ」

突然聞こえてきた悲鳴に、俺は紀京と顔を見合わせる。疲れた体に鞭を打ち、頂上まで駆け上がった。

頂上は丸い原っぱのようになっていた。雑草が伸び放題なもの、真上に満月を掲

げるその景色は、一つの絵になりそうだった。少し先にはコンクリで、眺望のきく高台が作られていた。その近くにはベンチまである。

そんな日曜日には多くの家族がピクニックをしていてもおかしくない和やかな景色の中に、平吉は無様に伸びていた。その横には彼の顔を覗き込む紗耶が居る。

「おい、一体どうしたんだ？」

俺と紀京は二人の元に駆けつけた。

「章輔ちゃん、平吉ちゃんが私を見た途端悲鳴を上げて」

紗耶が長い偽物の髪を掻き上げながら、ちょっと困ったようにそう言った。そして伸びている平吉の頬をぺちぺちと叩いた。

平吉は極度の怖がりだ。独りで取り残されてガタブルしていた所に幽霊っぽい人が現れて驚いたのか。俺と紀京が体験済みだが、ぱっと見て脚はないように思えるしな。

「平吉ちゃんったら、人の顔見て驚くなんて失礼だよ」

紗耶はそう頬を膨らます。酷いなーとそう言いながらウィッグを取り、肌襦袢を脱いだ。私服の上にもそのまま着ていたようだった。そして平吉の横に置いてある鞆に押し込んでいる。

「ねえ紗耶、もしかして紗耶が肝試しを今日に延ばして欲しいって言った訳って」

「うん、下準備のためだよー。ウィッグ買ったり、肌襦袢を黒くしたりね」

紀京は脱力したように、平吉の横にしゃがみ込む。そんな紀京を横目に、紗耶は俺の耳元に口を寄せた。

「ねっ、上手くいったでしょ。これで紀京ちゃん、章輔ちゃんのこと見直すよ」

計画通り、そう言って紗耶はにっこりした。

「バカかお前。俺まで脅かしてどうする」

大きな溜息が口から漏れる。しかし、

「あーっ、章輔ちゃん、見て見て、妖精さん！ エメラルドグリーンと紫の目の子だよっ。こんな所にいたんだー」

と紗耶は急に叫ぶ。そして虚空に手を伸ばすと、俺の愚痴なんてそっちのけで、何やら追いかけて出す。そしてそのままずっと原っぱを駆け回っている。駄目だこいつ、早く何とかしないと。

「ん、むうっ」

そんな騒ぎの中、ぱちりと平吉が目を開ける。

「平吉、起きたか？」

「あれ、俺何で寝てるんだ？ あれ？」

平吉は上半身を起こすと、左右をきよろきよろと見回す。どうやら恐怖体験は彼の記憶から抜け落ちてるようだった。ま、それはそれで良いか。きっと平吉は、自分が紗耶に対して悲鳴を上げたなんて知ったら、一生立ち直れないしな。

「そういえば、紀京ちゃん達ってリボン回収した？」

ぐるぐると走り回っていた紗耶は、突然ぴたっと動きを止めるとそう尋ねた。

「あ、すっかり忘れてました」

紀京は憔悴しきった顔で答える。俺も紀京も、そんなことすっかり忘れていた。と言うか、あの状況では覚えていた方がおかしいだろ。

「やったあ。じゃあ今回はあたしと平吉ちゃんの勝ちだねっ。今日は妖精さんにも再会できたし、良いことばっかだ！」

肝試しに勝ち負けなんてねえよ、そう突っ込みたかったが、その気力さえ俺には残っていなかった。

紗耶はまだぼんやりとしている平吉の両手を取ると、ぶんぶんと振り回す。平吉は先程の疑問なんて吹っ飛んでしまったようで、でれでれと表情が緩んでいる。

紀京と俺はそんな二人の様子を尻目に、空を見上げて月が綺麗だねーとぼやいていた。

* * *

「章輔さんっ、約束通りホールのケーキ買って下さい！」

月曜日、学校の帰り道で紀京がそう叫んだ。

「何でだよ。どう考えてもお前の計画は失敗だっただろーが」

俺はぶっきらぼうに返事をした。肝試しのおかげで平吉と紗耶の仲に、何か変化があったとはとても思えない。あったとしても寧ろ悪い方ではないのか。

「うふふふ。それが、違うんですよ」

しかし紀京はにやにやといたずらっぽく笑みを浮かべる。俺は疑いの眼差しを紀京に向けた。こいつ、俺に嘘を言ってるのか？ いや、でも嘘を吐いているようには見えない。じゃあまさか本当に… …？

「とにかく詳細を願おうか」

紀京はくるっと身を翻すと、歩みを妨げるように進行方向に立ちはだかった。そして俺の顔を見上げ、弾んだ声で言った。

「今日、紗耶が言ってたんです。昨日の平吉ちゃん、とっても可愛かったねって！」

「可愛いかなよ」

俺は思わずがっくりとなった。紀京、お前はそもそも頼りがいのある平吉を演出しようとしていたのではないか。それがどう間違っても可愛いで、しかもそれが成功で良いのかよ。

「でも、可愛いですよ？ これって褒め言葉ですよ。紗耶はほら可愛いものが大好きだから、つまり平吉さんのことも大好きってことですよ。間違いありません」

「しかし、くつついた訳ではないよな？」

「付き合うか付き合わないか何て些細な問題ですよー。好感度が上がったのは間違いないので、ホールのケーキ！」

俺は頭を掻くと、前に立ちはだかる紀京を邪険に押し除ける。そして彼女を置いて歩き出した。紀京は後ろからケーキケーキと言いながら小走りで追ってくる。だが俺の思考は他の所へと飛んでいた。二人がそんなことを話す機会があったということは、つまり――

「あ、ホールだからと言って十二センチは厭ですよ。二十二センチくらいはないとホールだって認めませんからね」

「だーかーらー、俺は買わんぞ。そんなの認めないからなっ」

すぐに紗耶に電話だ！

家に帰るなり子機をひったくり階段を駆け上がる。紗耶はもう家に帰ってるはずだ。お袋がのんびりとした声で、おやつあるよーと叫ぶがそんなことは無視だ。

昨日の俺は頼りがいがあったぞ。幽霊に対しいささかの躊躇も見せず飛びかかったぞ。まあこの言い方には多少語弊があるようにも思うけれど。しかしそんなの気にしない。紀京は格好良い所を見せた俺に、好意を寄せたに違いない。可愛いなんて残念賞で終わった平吉とは違って、俺は紀京と結ばれてみせるさ！

はやる気持ちを抑え、震える指で慎重に番号をプッシュ。

トゥルルルル、トゥルルルル。

「はい」

この声は紗耶だ。

「もしもし、俺だよ、俺」

「も、申し訳ないのですが、うちオレオレ詐欺はお断りです」

「あのなー紗耶、章輔だって」

紗耶のテンポに合わせるのは難しい。

「あー章輔ちゃんか。びっくりしたー。オレオレ言うんだもん。これが流行りのオレオレ詐欺かって、ちょっとわくわくしちゃった」

「お前なあ、詐欺にわくわくしてどうする」

そう返答して気付いた。いかん、完全に紗耶のペースに飲まれている。このまま紗耶の調子に合わせていたら、肝心のことを訊くの忘れてしまう。

しかし俺には見えるぜ。紀京と俺が付き合ってるという幸せいっぱい夢いっぱい未来が！

「そうそう。あのね、エメラルドグリーンと紫の妖精さんがね……」

まだ何か話そうとする紗耶を俺は遮る。

「待て紗耶、その前に訊きたいことがある」

「ん、何かな？」

「俺がお前に訊いてくれて頼んだこと、どうなった？」

暫しの無言。俺はその無言にどんな意味があるのかを考え、緊張が高まって行く。

「あー、あれね、紀京ちゃんが章輔ちゃんのことどう思ってるかってやつだよな？」

「そうだ。で、どうだったんだ？」

俺はごくりと息を飲む。

もし紀京が俺に好意を持ってるなら今すぐ紀京の家に押しかけてやる。今、この気持ちに決着が付く！

「あのね、とっても言いにくいんだけどね……紀京ちゃんは章輔ちゃんのこと好きじゃない、って言うか寧ろ嫌いだった」

ガシャン。受話器が床に落ちた。「も、もしもし、章輔ちゃん？」という紗耶の声が聞こえてくる。しかし俺は受話器を拾うことも出来ずにベッドに倒れ込んだ。

寧ろ嫌い、と言う言葉が頭の中でリフレインする。好きじゃないならまだしも、嫌いなんで救いようがない。脳内に紀京の愛らしい笑顔が浮かんでは、次の瞬間に彼女は顔を歪め「章輔さんなんて大っ嫌い」と叫んで消えていった。

俺、今まで何のために頑張ってきたんだろう。虚しい疑問が胸を過ぎり、俺は枕に顔を埋めた。そして泣いた。激しく泣いた。俺は明日から一体何を糧に生きていけば良いんだろう。

そしてそのすぐあと、突然部屋のドアが開きお袋が顔を覗かせた。

「おやつあるって言うてるのが聞こえないのか……って泣いてんの？ なによなによ、失恋でもした？」

泣いている息子をいたわるにはあまりに軽い口調で、お袋はそう言った。しかも言い当ててるし。

「空気を読め、くそばあ！」

俺はしゃくり上げながらお袋に向かって枕を投げつける。しかし彼女はそれ軽々とキャッチし、にっこり笑顔で俺に向かってぶん投げ返す。ああ、綺麗なフォームだ……。枕は俺の顔にべちよっと張り付いてからベッドに落ちた。中身は綿なのに、何故か痛かった。主に心が。

* * *

紗耶は自室の絨毯の上で、クッキーを食べていた。彼女の横には子機が置いてある。つい先程まで章輔と話していたのだ。

「でもね、あたしショックだったんだ」

紗耶の前にはぬいぐるみの山があった。ぬいぐるみだけで、誰もいなかった。しかしそこに向かって紗耶は話しかける。

「それにしてもべっこう飴好きだねー。美味しい？」

うさぎとくまの間から、猫と鼠をかけあわせたような小さい生き物がひょっこり現れた。全体的に寸胴な体型で、その背中には半透明の羽が生えている。そして両手でべっこう飴を抱えていた。『うみゃー』

その生き物は紗耶の言う妖精だった。妖精は紗耶の問に対する名古屋弁での答えなのか、それともただの鳴き声なのか定かではない声を発する。そして自分の大きさの約半分あるべっこう飴を再び舐め始めた。この妖精は頂上でべっこう飴をもらってから、ずっと紗耶に付いてきているのだった。

「あたし、まさか紀京ちゃんが章輔ちゃんのこと、嫌いだななんて思ってもなかったよ」

紗耶はクッキーを咥えると、前屈みになり妖精と視線を合わせた。そして人差し指で妖精の頭を撫でる。妖精はエメラルドグリーンと紫の目を、気持ちよさそうに細めた。

「絶対にあの二人はくつつくと思っていたのになあ。でも嘘をつくのは良くないもんね。それに章輔ちゃんに報われない変な期待を持たせるのも可哀想だし……」

『うみゃっ』

紗耶に同意するよう、妖精は羽をぱたぱたと動かした。

その日の昼休み。購買から教室へ帰りながら、紗耶と紀京は昨日の話題に花を咲かせていた。

「平吉ちゃん、とーっても可愛かったね」

と、紗耶は、何か思い出したように唐突に切り出した。

「あ、ところで紀京ちゃんって章輔ちゃんのが好き？」

ついさっき買ったパンを片手に持ったまま、紀京はその瞬間ぼんつと顔を真っ赤にさせた。

「な、なななな何よ何なのよ、突然」

紗耶は慌てふためく紀京を不思議そうに眺めながら、

「だから、章輔ちゃんのこと好——」

紀京は紗耶に最後まで言わせなかった。

「べ、べべべ別に章輔さんのことなんて、私、好きでも何でもないんだからっ。変な勘違いしないでよね！」

紗耶は信じられないとでも言いたげに目を見開いた。紀京は肩で息をしながら紗耶をきっと睨み付ける。

「好きじゃないの……？」

「え、ええ。当たり前じゃない。全く、章輔さんなんて私が好きな訳ないわっ。そうよ、寧ろ嫌いなぐらい！ あんな奴を私が好きなんて有り得ないんだからねっ。本当だからねっ」

怒濤の勢いでそう言い切ると、紗耶を置いて廊下を駆け出した。紗耶はあっと手を差し伸べる。

「紀京ちゃん！ ……あたし達の教室は逆方向だよ」

しかし紗耶の呼び掛けも虚しく、既に紀京の姿は見えなかった。ただ壁に貼られていた、生徒会役員お手製の「廊下は走るな」ポスターが、虚しく揺れ動いた。

もぞもぞと紗耶の髪の毛が動き、そこから妖精がひょっこりと顔を覗かせた。紗耶は妖精の方へ顔を向けると、

「紀京ちゃんは、何をあんなに焦ってるんだろうね。そんなに早くパンが食べたいのかなあ」

と、訝しげな表情をした。

『うみゃうみゃ』

妖精は全身をぶるっと震わせると眠たそうに目を細め、再び髪の毛の隙間に潜り込んだ。

[戻る](#)